厭蝕太平樂記　拾壹之

へ 13
3553
11

厭蝕太平楽記巻之十一

目録

一 船中にて諸将評議の事
附り 薄田隼人勇力の事
一 吉野大合戦の事
附り 今福表にて出合の事

門 へ 13
號 3553
巻 11

早稲田大學図書館
昭 33.11.10 受
藏書

獻蝕太平楽記巻之十一

舟手の四将紛ふのなり
なり蒲田隼人勇なるり
舟手の四将(しやう)大くだれして列れ金兼に
出しそろへてたせ出し大きなまさん
て追掛(おつかけ)る有る言萬(ゑんだ)路も何とより
はじひて追(おつ)かける白井(しらい)将監(しやうげん)声を
かけてよ方のあしめけども伏物
計まてかちりしなり思へんしのまる

と鼓の中へ入りしとぞとりかゝさらし
金兼小出ハ長谷部が籠手をつらぬし
前後をもかまはず追つけ出でて長谷部近
く寄つて右の方かまへ膝を動くいふや
鉄砲三挺縦横会めけれバ見るもと
驚きし内子件桐郡兼日会人内膳
三よ山田安兵衛同安助同幸内郎同
而紀伊助右衛門大崎内蔵助萩原又人
同近同丁子飛弁作よこし矢を入まる後を

み兼氏より藤ふ金兼て後の事へ入るら
籠を立大鳥毛の白紙雨るまさて下
知らぞ金兼小出に大きに驚けれバ
追つけて後を立ちバ兵を三ツ見て首
をとり長谷部が種子を取りて川後藤り
仙石明石の田振子を寄つて幸村が
知條かん大雁を見る所の右馬
言葉内頭兵衛らかんて言葉子を出し
い子作勢あるは出てけよく是ある事し

ときて追つけ大阪勢ハ不意にうろたへて
引すでに追討せんとの向かまへ
鉄炮を打出すに天満勢を登
数多く向ふ黒木蔵介が手勢田市兵衛
川手主税笹原母波木村助右衛門
伊藤源兵衛牟礼庄庫内藤三郎
各々鑓をひらめかし突くずす木村もろとも白
地に三ツ目結の旗をさし金の幣のさし
物揃えて八方に下知してあひとどめ

首をとり二ツ三ツとつて引とりける
後藤右馬之丞首二ツをとつて先備へしとて
後藤にむかひて此よしおのしと一ツ打
みうつて鉄炮すづしとて自身にまつり
先にすすみて追かけけるに西手の口より
有馬玄蕃小出木工まけじと後よりすすみ
行所にたちまち生田大助枝堤より
百人の人数にて押出し白井九鬼木
左右に並んで大助勢をとりこめてまつさん

とも有ことを見るとかりて大助が
石火しげくはなしよせたりみだれ鉄炮
おそひかゝるゆゑいづくまでもと追懸れ
よし時の中より一手深谷清海入道
一手伊三入道一手穴山小助一手望月
いづれも百人ばかり伏勢に顕れ出
三十目二拾目の筒をうちかけ小勢
まで大敵にはなやみせめ鉄砲此井ことを
きとて後藤木村も手柄も一所に

突かゝる勢ひは凄まじく金森出雲有馬九鬼
向井大将くづれて逃げければ大坊勢の
後をはらうて陣の中へ追こみ首級
明石仙石多田あと段止めて騒動をしづめさせ
城中より引返しかね振にて城兵は押とゞめ
まさにおそひかゝる軍勢掃部大坊はおくれし
勇みたちみて退きける此時先陣
志をせあるは後には小笠原本多村高兼
続いて割付あり人数をもつて四郎の

御座を下りて梅太助伯父が聞にまきし蒔田
かゝりしる所へきこえて中々作り給ふ
深意と聞し時のさまになりあらじんかな
其の法用に立づしと大きに感じてさて
城をやすめの形をなして四季のまなあり
東は麒麟南を朱雀西は白虎北を玄武
大助をあ西将は宮内少輔二親南帥
をも門に重成北は将又気基次と
定め此趣を諸将にゃ渡し これより

籠城して守りければ大軍とのいさましく
つとも安穏なるべしと大将ときも
母君是を聞て御母君も喜びを添へて
涙どの其田まむ兵軍師の詞なれば
何とも何の其分がより家にそぢして
不便にも此有からずうつ時して申し
てなるべし其かたりなる軍の額の人
数をとり上めて二度で何をもいかせ
ば同じとなり寺村よりも梅をあんぎ

の御上意(ごじやうい)是(これ)にてハ私軍師のかひもなし
なくハへつとも一つるの御前(みんどう)ハ恐(じやう)おほせさるも
いかなり畏(かしこま)りたりと出張(そちら)も上(あけ)てこそ
大胆(たいたん)にむかひけるがハ武まくまへしおく
べしそれ其元(そのもと)謀(つよじ)ハ口(くち)入せてるまするふと
どきいふ其選(せんぜん)なり此義(ちうぎ)を御存(ごぞんじ)なくんバ
何(いか)にちらく今宵(こよひ)名将(めいしやう)が先(さき)のかし
ところもし大将にて味方(こゝろ)をうちつれるなバ
敵方(あくき)にいかにんやこれがの内(うち)に軍勢(ぐんぜい)ハ

筆頭(ひつとう)ちくら助が関(かん)川口(かはぐちとう)おめの人数(にんじゆ)を引(ひき)とり
中途まで来て其(それ)ちりまさし籠城(ろうじやう)せし
こと敵(てき)に志れずゆく其(それがし)が軍(いくさ)ハかまハずん
軍勢(ぐんぜい)ハ先(うしろ)よりことを立つ手でもちぬまくさし
おくなり所(かこぎり)相国ちは元(もと)は残(さんげん)て何のつまらん
本城(ほんじろ)の大事(だいじ)大将(おやう)ハとるて誠(まこと)に其元(そのもと)ハ
敵方(てきがた)の同志(なかま)の中ふく存(ぞんぞ)なり御願(おがう)りの
人数を入れあげず与平は閉門(へいもん)ゆかすとて
おりこなりきて其(とうで)の人数引(ひきとり)そして

然れども大御所なこれ生ておかるのみ
志をせまじき為に益をさし奥とし
あゝ口惜きるけれどもいふさるほどに
公は修理大夫羽柴筑前守の守護して三大目
筒三拾丁うたせしるるよろこび
てあるる法印に抜さし蕪刀抜三尺ある
請のおいて押うし白しはらふ二尺のの
大将大ふうちまけうるうしよる
又小出金兼がくづされてしまうし

浅野有るわ総軍のよし追かけ来る
公大将驚きのりて御指あるまし
豊後有る法印があつまの上へ押し
のひ比さく岩の人数引れうるとう
ざるう込つくてあるる岩の人数みえ
引れ中さづとか上りまてかりし惜きかん
まで互御立て取たり
修理亮ハ釈名ら嗜の取窘して命るの
難引に陥るくてびき残るの兵ようべし

さねもひやうらうせずして武具をとき
て休みゐたりし所へおしよせて討とハさうそく
責破るべしと中村左近山田織部兩大
將の三百人の勢にておしよせける
ほどに藤田隼人ハ寄手平子のうち白旋
置ては三百人にてむかひせしが残りハ二百人
にて寄手勢出て伏勢として待構たり
兒玉村がおしよせし處を取こめて山田
中村ハ至極の謀計なりとてひそかに

押寄せて時をこそあげんとむかへ責よ
せんとぞ手配して主人のいでんとする
またちまち平子うち白旋籠る敵ハ十余人にて
引請て鉄炮うちかけ中村山田を
驚きて下知をもとむる所に藤田隼人ハ
兼相白をの陣より言にて入八方を
蜂巻して入て七十人まして作る所の旗を
もちてうち入四角八方にわかれてまる
ろ時平子白旋も清いざして

前後をつゝみ新手の中村山田あや
うき時平岡甚助岩上七八山本三平
森下源内沢口弥八草野五兵衛味田
彦兵衛七人討死する内に余軍勢は
逃路をはかる荒田平子は大助が組侍
をとんじて中田にいそし来村より
引退していそて出く引取る
鴫野合戦の事
并今福合戦の事

同十一月廿六日佐竹右京大夫の家臣梅
津半右衛門篠田蔵人卿半三郎兵衛戸村
十太夫戸塚九右衛門ら五人の者陣まはり
の勢早朝鴫野のほかまちいりけるに矢野
和泉守がこ足軽中間百人境目へ
して居る所へ立向ひ家老渋江
内膳すゝみ出ていどみて牢陣まはり
佐竹の敵の中へおしいりて
鉄炮打かけてはいりて渋江討て

乗取べし先ごろ見分仕るべしとまり
堀江升八行て見るに地形あやうかりとも
依行は右衛門とつげゝれば右京大夫
兵部承りしあくからふば修理亮
きこえてとも此なき小事にてたのまり
がくし此事いろんと評定する折
ふしあんとう左京は陣取まり
されば右京大夫まねきよせて評村
ゑんしてよろこび給ふかくてされん

治右衛門ハ門んでて行て先手のほかにこさせん
ハそれぞれしよろしやしらせまつく
かくて一中にて討首五千人四百人
八鉄炮の者あり梅津黒田小野
三人あるの五千人にて鉄炮二千
下堀江まで三番手侍五百人
今大郎坂力の侍ハ一番矢野和泉
五百人あり二番大路主
五百人三番木村長門守七百人先八

城内に侍る今福づゝみ城にこの侍そ
名飯田左衛門五百人二番は渡辺
内蔵助五百人三番後藤又兵衛七百
人なりいづれも木村が陣を請て
後藤又兵衛木村が城内よりそゝくへうち出て
佐竹の勢引もきらずおそひくるも大勢が
よしなきつけなをして十日の戦い
より敵へ先田籠城をさせしとて
そのまゝよしておきぬゆく内

言ひをと手威七郎次にあへて城内に
侍へうけて佐竹勢八七百ちんじや中手
梅津戸村十塚篠田黒沢ら人鉄砲の
者許千人ばかり堤のかげにかきのび
よすつよにあらされ鉄砲短ち
かけるに先勢が鉄砲隊に大など
はづまに殺していしがおそひよるづる
るすなまいてとなまでにおそろきうけ石
もうそうのもたるで通くずする五人

の佐竹のかり収追かけ打ふせて首
取られ矢野和泉守討て出てふせぎ
たゝかふ所へそのなんぎにおよびける
渋江内膳をはせたすけて加勢あり
手をもつてたゝかふなる折節大勢
かゝせいくずれたちて和泉守やりて
のがれぬ所と敵にかゝりて切ふせ
打合せ討死する内膳追かけて
其ころ今福堤と小川と云ところ

押し討まゐりて同じく返し飯田なる
らけまする河内にしてたすけ
来る横にたきて命をすてず
たゝかひ渋江らんぎにてゆるところへ
又佐竹の旗本勢あつて拙にて
へくしせ見たゝかふ飯田その勢
みてかなはず一同に引かず討死す
佐竹がた大将利をえて兵をば
まとめて追つけたる五千余大雨

こ介一戦もせすおちけべりけれバ後逃
内藤か兄弟今福の二手ハ備前。
押それてまけけるが。佐竹方より
鉄炮の音に恐まされてまけけるかなり
鴫野川へまくりたてられ海に落て大半
右越のなんで家来にたすけられ逃
いのちからがら逃かへり候者わ
侍りけん
落あくが浮名残すなん鴫野川

敵かあらそて八月七日内藤の介
さて木村長門守重成八千余の兵を
守田市兵衛大井何右衛門無礼者
伊岸又玉木氏ニ子松浦遊世忌右衛門
松原五左衛門山田五兵衛介知坂伴
大野木主馬宮村主水介右十三人
雅楽介りんつべ木村五人頭の
主計者三郎の作左一人手派て此十日
筒井十郎兵衛のむ橋の雅楽七枚をもし

此方に籠城せられて人数あつめて下知していろ〱各手をわけて敵をふせぎとゞめんとてたゝかひおとらせとなりまさかりやちぎりき杖のちぎりきしも長刀をかちにて敵の陣になげともに鎧の袖ゝ射通しさぬほどに金銀入れ揃のかるもまりてそへいれよしとその木にさるわりて四百人右の人数ぞそえておらいハ白地に四ツ目結の目印合印を

岸といふかぎりまでと定め籠さしに日野根九ヶ条といふて日本七拾里を歩行きたる大力にて大太刀をかざし長刀にて敵をなぎたてしかばこそ猶せしに此方に籠城せし大将の輩にて渡辺が来りてつよくいれかへていふ八の字よりかゝりせる渋江内蔵息がつぎて此門をくだけと下知なる本村ハ十分に敵を引付て時分ハよきぞすゝめてつゞけと

切てかゝる公方へあかゝりせめかけ切て
まはる佐竹殿を始として深江ゟ
きたる内藤をはじめ旗本勢の先
備の大将内山隼人馳くる所大井
河ゑろ鑓をあはせてたがひにきそふ
会徒子内山隼人をたゝきおとし
首をとりまづ大将を討とるまで
見るなれハとておとらずして首帳に
付んと筆者白井陣へ来り一番首級

当りといふ白井心得たりとて筆紙(?)
とられぬ時に伊豆甚右佐竹方
の山田新井日高二ッ首級とりたり
控へきたり帳に付んとする所
白井一番首二番首とつける大井が
いふくいぜん私に聞に何としてと見ん
ざることゝさゞめる白井がいはく二番首
証人さうる内ハ一番首とめざうまで
筆者の帳なりといふ證はきくもつとも

とてもかなはじと思ひけん平田
二郎の刀(かたな)はくびをとらず切(きり)ぞてふせべし
とて己に立て続(つゞ)いて佐竹も二郎手代
中より出て来る本條にはせ入(いり)来り
佐竹も命(のり)を落(おと)し下知(げぢ)されども皆(みな)こと
つゝきこらへず木村(きむら)は方々乗(のり)かけて
巴(ともへ)の字(じ)に行(ゆき)けり鉄炮の玉の来(きた)る
事梅屋(うめや)の雨(あめ)のごとく中(あた)るも直(ちよく)に
院(ゐん)は奥(おう)がし此(この)岡(がう)写しも角(かく)のごとくなりしが

節(すけ)全(ぜん)を六郎(ろくらう)方に入引巻(ひきまき)しかるに七人
ましくて佐(さ)手(て)をうちまはしてまはるその
郎(らう)は木村が手(しく)十二の者人の勇士(ゆうし)
いづれも決戦(けつせん)して向(むか)ふ所(ところ)敵(てき)なし
佐竹安陣(あんじん)を出(いだ)して引(ひく)を見せてかへらん
下知せられ木村も候(ぞうあく)にならて
もせさりしかば佐竹どのは其(その)ことに
清和(せいわ)源(げん)氏にして宇多(うだ)源(げん)氏と
ただのみ武(ぶ)家(け)たり縁(ゑん)者(じや)ならずと

よそて切てかゝる佐竹も剛ぎりと
戦ひ何れおとらねバ力江集人
中川文次二人の勇士かけ合おめき
さけんで戦ふ所に木村助五郎中川
と渡りあひ一心一刀の野太刀振ふて
中川がきりこむる所を木村剛気にかけて
まてしくづれ立所を力江
集人ともたさま見すて突合七人を突
こゝろれそのあとに佐竹太刀をふれ

てひきとり木村もろともいよいよおそれ
かけ切こぶし其間に佐竹の勢
給分かを討とる其ものをとまれ木村
おひとともんば勢に立敵をとずかりくて
て息つぎ次に軍勢も討とる見切

木村長門守が事
并に後藤又兵衛が事

城内より長門守成が初陣をつん抽
せんとて秀頼公淀どのそのかぶ中

免し給まへて職の鉾を給はりやがて
上りましたまひて立願ありしかてさきを
つんて大きなるうへしのふさへて文箱山
みいつの佐竹の物頭五人きこえりて
矢野の和泉守るが首飯田なるま升が首
都へのぼして実検ありしかば公御くん
あって五人に御感状あって五人悦び
て隙りよたちまち佐竹三の柵を
中づまゐとえいりよありて公御よろこびあって

佐竹にかん状をさづけらる時ふ所より
告て秀頼公馬ぐくしかゆりりの
よしえいりよありて公のおほいに九月ふなる
が嗜より嬉はかなぢてたぞくひたりける云く
日向の擬てうをもって片桐がはなよりまう
標をまもって佐竹は城内に
つかきせんとかつて中村大和を召
よばれて城ぶしん海老名大工の棟
梁よりそ職の秘伝を以てやぐら

一ツ首をあげるゆゑ佐々木へ云ハだれの
横ぞくと羽柴のふ中井大和守ハわけまき
近ゞ大切れ矢りて此わくし天下の
佐為ゆくやよ上京ハ略聞の橋渡師
仰しれハゆうぅ佐々木押て中上余のなは
秀頼公渡どの残ひ佐々木見物をし給ふ所ぐ
尼倍守の橋かれて周てへ上様中納言
ハ佐竹の大切をきゝてまれいけん
ありしてあるを口惜がりて死ぐれ

しが佐竹木村に追くづされし残
らんそ悦びたまく木村長門守のそ
せよ鬼神にもせよ今ハ残ひ清う
まぢてあるべしさされハ木村に城よの
あまく乗込み討まゐて高名せしもと
下知されバ伝蔵ハ直に川渡して
してさしけびとしかゝる時に城より
思の外を見て先に田こしらくおき
られハ諸勢に下案ハ岸山動しまた國

余人山田吉左衛門同助左衛門同外記
同兵介織越新五同甚内同丹下矢沢
萩原小草川久保内山兵庫小田甲斐
乙ら丹十三後へ一騎づゝ騎
計十日箇五丁と定め上杉勢川を
渡して上原を打くずし八方
に分かつて切ちらしけれバ上杉
も残兵そこかしこにて押こめる
が又あまた家来ども扣かけて

せんと相太刀をたゝかひ上杉を川へ
追こめ惣勢をくだしおつたゝめ
川へ追こめ討ける首七百六十余
されも上杉ハ川中のまこみ有の河を
遠しくらして川へ入り鎗を
おそし去づくて甲の星だゝきり
てつゞけるそこに後藤が家来正木左衛門
これをみつけてかけ来り引つけて
引よせる上杉をあまてまおゆうすき

みな家臣戸田甚平は佐々新兵衛
京にて追きたりおうて上杉を打ず
けりとて上杉大きに怒りて後藤
又兵衛木村のほか佐兵衛もって中川の
ちからぎ引く討くぞ将が
いくさはとりたゝかれ木村と
引れ後藤に対して乱れのぐ
引けれ佐竹息をつぎ木村が引け
かくて無ねんにおもひて深江に

下知して一度に突入て片山勘兵衛
深江因幡が先手をきりくずしつき
おとしくびを取残兵を追ちらし
かれハ佐竹いかりて後陣
勢て押よせ又兵衛も後陣にかけ
いり四角八方に向ひて京中する
又佐竹大いに働いて一れ又兵衛
深江が首をとりて生捕の者を数人
たすけて深江が首をとりて逸し

たりし道佐竹の備へ清江が討死を
る隙にもれありしおさめたりしところ
京極丹波守堀尾山城守二将は上杉の
二陣より先陣の上杉が陣へ佐竹が
うちまけしゆゑにて後陣たゞちに
井上など今橋より川をこえず此時
木村主殿が堀のきはまでせりかゝる
かこれ敗れて引くし今敗もいそぎ
たいくども忠しんの魂魄ぜず

大島の役よたゝぬものもしゝ気たる
主殿はいくさぐるまを櫓のおもておかり
たまへしやう上る段をおろしきたり
かくて高く荒田大助宗が討きゝて
せいをひきへしやうにる時十五六
りんのきたれ太塊をくぐるて
羽をもりひきしにみゆるてんでに
おりしものくゝつ主おもくぐし
お畑はこれんこみしづみ

然るに主従が計ひ出して秀頼公一段
しりぞきましてハ云ふべくのにして本丸ゟの
時に惣勢ゆゑかゝるところへ攻入てせめ
いどんと寄せてありける所へておし
よせ来るをとゞめて我も我もとぞん
橋よりより玉目其の目前を三千
丁斗りまてゝよせ手にいかにも辛まり
死しけるおん目附中等などして
引きゝ面しとめんし体よく

ゑきいとりける時本丸出合ける処へ
まいりかくてもくじず引ておりけれど
安藤次右衛門中々もちこたへ得ず限りあつて
足場はしくそまよひゆく手にかくれたまゝを
是に此趣を言上しけれバ公のたまはく
宮平八郎は足場なるべかいかゞなりとせ
ましき者を宮にはかりまそのし
と仰しまだる出でまつれバきて諚
合戦よ討死なりけるとて公にハ御行よ

始めうち軍に後のまけ上杉三郎
堀尾なんど大きに負ぼうして奥く
ろう城をなしけるにご極姫よろしく
けな坂方すけ櫓のくづれは雨露にて
つゐみ門をとらひ清めをも四谷姫ぶん
いがれて南のへそろひは皆二ん秀頼公
をはじめ奉棺かおはし出しかけにその
よまるよいろく
そのもとは御鎗さし警きんかげりけり

は自分と長楊枝を別れは節
申合せは通
貴公のは大かたきてひやりる中井
大和屋どのにて手の陣ぶ
より大門にて櫓打くずれし
は戦いは虎の物とあれ心はそのもと
さろく将軍より、ごぜんへきはこ
きこみは敬ふあつてこころは
貴公のさまうよろてかたまる

急なりとて早速に入は又首をさけ
るやうに仕つけしかば終に気乗をひ
此事用いしと

片桐市正且元判

十月十日

木村長門守殿

とありければ伝土岡なりし上
かゝる時に矢櫓をくづし内母の危
籠城ならんとせし大坂どの

其村が邪魔ともおぼしけるに　おのまが言地
じて続為が先の大事を敵とし遂
しゆくなりし所としおぼしめんし
然に片桐がかの首二心用にて立る
やうになし内なるをもくひなりける
おぼしめし大坂が悪なるのくづし
召し居中て国を定して中よる中
本村らいふし今軍師ともの首を
田ひのなる時常西が出大なりそれがし

序柄が主のきゝし御ゑがしけるみかて
謀叛を告し時光秀ハなるゝ筆を
やもらるゝそてハけらず敵方にあ
名を投入れをも敵方にあるてもこゝろを
君のなるぞありてるハ君をたてまつらん
とりせしが織ふ遠ろくにたまいけり
みそろく信のくがをてこし
一子ろぬ忠節をおほし免し
いこされよとてなるぞハ満しや

ならぬ御とのさまぐゝ恥らしくやあをて
免してまいらするなめりたまひそ
南洞ハなるをしおもひしまゐらせて
各臣にあれしたるまゝにさせて
山すい序柄にもはじめて大目のさけ
たまふまでもをかくり候けきいへの
なからすらハとうがをなさずとかよ
公のたまふを郎ハ機分様時悦おや
まさ味このうしかう時よぶらてかや叢し

いたく君をなやまし奉るとかや
太宰府の私に今は御休息の御所にて八
左遷せられたまひしまでも御身の縁を
中時に離れ叔伯の縁を承り給ひまで
よろこび中公の御たまはりたまはり
さて天下を一所が世となりしを
ぬいちぎまで西が心し前主様に
めしつかはれ逢たるべし私伯夫人
叙爵が拝任をまで申き高野山に入

果べし太子も御らんありて四職
たゞ中より依田にも御して其主様中
教訓して高野山に日千日行
を勤ひきしめさせよしてけれども
なほ御歓も味ちやくもにて忠義を
尽すところなれば是非かなしるより薫燕勧
其元来大業なれば不覚をむりしよ
神崎の中のしゆうの名の大将池田高
少輔は武蔵の守の大坂織田なり人数

三百人をもつて神崎口にひかへたり
池田兄弟ハいまハかたらずして中の
しまの織田信秀と示しあハせんと
ひそかにしめし合せて相図を定め
る首尾なれバ信秀も相図を合して
たがひに示合せる池田ハ足軽をして
鉄炮うちかけておめきさけんで
かゝる合図をかゝげ河をわたせとせみ
立てるを打入らんとしてかゝる織田も

鉄炮をもつてかゝへて戦ひけれ
ども寄手の勢ハさしたるひまなけれ
中の嶋の織田勢をうんしうと見かけ
池田兄弟ハそのまゝ人数を立て体をなし
同十一月十二日の日暮におよびけれ
たがひに軍ハ終るにけれバ白川に
あつまりし人数ハ大坂がたの一の手
を固めしと聞くの中にも九鬼長門守
まで大将のり人数を持つて引われハ手の内

隠(こく)れなき者なりしが百(ひやく)人(にん)余(よ)の
足軽(あしがる)中だん小舟(こぶね)に乗(の)りたる大将経理
も物頭(ものがしら)なりけるが是をみて逃(にげ)られたる残る百人の
舟手(ふなて)の者どもことごとく討(う)ち取られて逃(にげ)去(さ)り
味方打(うち)取らせ首(くび)三千一討(うち)取(とり)軍兵(ぐんぺい)
中にも逃(にげ)くるけはひ惣舟(そうぶね)勢をそろへて
たり九鬼(くき)勢(せい)が八風(はつぷう)丸(まる)を取(と)り放ちける
時に勝(かち)時(どき)あげ大将をはじめ
見くせんに首(くび)とり出(だ)し太刀(うち)を

くるしくもなくこゝろへてきたるその舟(ふね)に有(あり)
舟(ふね)に飛(とび)のりつゞいて乗(のり)うつる白井(しらゐ)が
るのゝしる恭言ふたり九鬼(くき)が家来(けらい)是(これ)を
きゝておゝいにおどろきかの者のを取(とり)
たる舟(ふね)を隔(へだ)てこそさるほどによくみよ
白井が臣かいさく恨(うらみ)は遺恨(いこん)あり
てろ者のしが跳(ひ)る九鬼(くき)あらがいなく
もなくかくしてさらく太刀(うち)ぬきくるとくきては
まてさし敵(てき)あらはひきうちとなり

かみかしらのうへハしゆうと名乗
たるみハ何といふ名ぞやと大きに
いかり白井いろまして霊剣なり
おのれらともでずまじ打かたんと
とかぶ不九鬼右門ものりかけて家
中路ゑだらんやらいば白井どもよく
高名したくおもひしが免せハこそ
此まま月中旬すぎのかたくて引を
まくりのみぞらし御前石大なき

まちうしあいたてしかれハるかゆく
あとおきありけるばかりに御前きるま
なりしは三九鬼が別れして出ん
じゆうたいさまきける

敵討太平樂記巻之廿一終